体育学における人間生成理論の構築に向けて¹

—Guardini, R. の教育学を中心として—

阿 部 悟 郎 (仙台大学体育学部)²

Abstract

The anthropologic problem seems to be the essential to physical education as an academic discipline. Therefore, the purpose of this study is to search for the theoretic moment to contribute the anthropologic discussion in physical education as an academic discipline, through the analysis of Romano Guardini's anthropologic discussion in his pedagogy.

The following two dialectics concerned with the existence and becoming of human being can be presented as important methodology in anthropologic discussion in physical education;

1. the first dialectic: the internal form of the existence and becoming of human being in physical education

The existence and becoming of human being are described as the strain between the possibility of existence and concrete being in physical education.

2. the second dialectic: the external form of the existence and becoming of human being in physical education

The existence and becoming of human being are described as the strain between object in given world and the first dialectic

In the strain between those dialectics, the system of the existence and becoming of human being in physical education might be grasped as a triangle relationship, and by setting the apex as the prospect point for the whole of human being and becoming, the trigonal pyramid is constructed. From the prospect point of it, the dynamics of the existence and becoming of human being in physical education might be irradiated theoretically in the anthropologic discussion in physical education as an academic discipline.

Key Words : physical education, anthropologic problem, human becoming, dialectic structure

¹ Toward the foundation of human-becoming theory in physical education —Based on Romano Guardini's pedagogy—

² Goro ABE, The faculty of physical education, Sendai College, 2-2-18, fumaoka-minami, sibata-cho, sibata-gun, miyagi-ken, 989-1693, Japan

キーワード：体育，人間学的問題，人間生成，弁証法的構造

1. 序 論

体育学が体育の本質を教育に見定め、それを徹底してつきつめていくと、人間をどのように理解するかといった、所謂、人間学的な問題に不可避に突きあたる。そして、それは体育学において人間それ自体をつとめて学理論的に把握することを求めるものである。実のところ、体育学にとって、そのような人間学的な問題は、永遠の課題であると言われて久しい¹⁾。ところが、体育学はそれまで必ずしも人間学的な論議を着実に、そして自覚的に積み重ねてきたとは言えず、そこにある人間学的な実績もおそらく十全であるとは言い難い²⁾。従って、体育学が人間学的な問題設定を試みるならば、まずは、差し当たり有効な関連知見を選定し、そこに周到に学んでゆく必要がある。

さて、体育学が人間学的な問題に取り組んでいくために、その関連知見を探索していくと、まずは哲学領域に突きあたることとなろう。なぜならば、人間学的な問題はもとより哲学上の伝統的な難問の一つであったからである³⁾。そして、哲学領域における様々な学的営為には、それが直接的であれ間接的であれ、何らかの形式で人間学的契機が含まれているという⁴⁾。それ故に、体育学が哲学領域に人間学的な知見を探っていくと、その多様さに混乱し、「山積した資料のうちに迷い続け」てしまいかねない⁵⁾。そこで、体育学における人間学的な問題の性質に、改めて目を向けてみなくてはならない。考えてみると、体育学における人間学的な問題は、体育の本質についての論議を教育という視座から追究していこうとするところから、必然的に立ち現れてきたものであった。従って、体育学における人間学的問題は、教育に関する知識体系、即ち、教育学における人間学的問題に類比的であるように思われる。教育学に

おける人間学的論議の数々は、体育学における人間学的問題の究明に対して有効な示唆を与えてくれることであろう。

ところで、体育学が、教育学の知識体系を眺め、そこから人間学的論議の諸形式を探し当てようとする時、教育への省察と人間理解は結びついており⁶⁾、そこには原理的な連関さえも認められる⁷⁾ことに気づかされる。それ故に、教育学においても人間学的契機とそれらの諸形式は、おそらく随所に散見されることとなろう。そこで、改めて教育学において、より直接的で、そして自覚的・能動的な人間学的問題設定を有する学的形式を模索していくと、まずはドイツ教育学の、所謂、伝統的な陶冶論とその潮流に位置しつつも、それを批判的に超克したとされる精神科学的教育学 *Geisteswissenschaftlich Pädagogik*、更には大凡それらの流れに乗じた、所謂、教育人間学等 *Pädagogische Anthropologie* の諸形式に辿りつく。そして、教育学におけるそのような人間学的諸形式の流れは、やがて実存哲学的な人間学的論議の数々に集約していった⁸⁾。ここで、教育学における人間学的論議の流れを、改めて実存哲学的な方向に焦点化してみると、そこから数名の論者が浮かび上がってくる。例えば、それらは Flitner, W. や Döpp – Vorwald, H. や Bollnow, O. F. であり、そして Guardini, R. 等である。彼らの学的営為を通じて、教育学における人間学的基盤の確立に資する実存哲学的な次元の視野が啓かれていったのである⁹⁾。従って、体育学が教育学における人間学的論議をより正しく汲み上げようとするならば、このような実存哲学的方向の人間学的論議についても、目を向けていく必要がある。ここでは、その端緒として、Guardini, R. の人間学的論議を直接的な分析対象として取り上げていくこととする。ただし、ここでは、かつて Langeveld, M. J. が教育学

における人間学的営為に警告したように¹⁰⁾、体育学もそれを他領域の論議から無批判に持ち込み、慎重な吟味を経ないまま、それを無分別に重用するような安易なことは避けなくてはならない。体育学は、他の学領域において生み出された有効な人間学的形式に相応の敬意を払いつつも、あくまで慎重な吟味を通じてその体育学的な有効性を見極めていなくてはならない。

そこで、本稿の目的は、体育学の学的確立と発展の為に、教育学における人間学的論議、取り分け Guardini, R. の教育学の分析を通じて、体育学における人間学的論議に有効な示唆を提示し得る知的契機の獲得を試みることにする。

2. 本 論

2.1. Guardini, R. とその教育学

Guardini, Romano. (1885–1968) の略歴等のおよそは Kuhn, H. に従い¹¹⁾、次のように纏められよう。彼は、1885年北イタリアのヴェローナに生まれ、幼少をドイツのマインツで過ごし、ドイツにおいて教育を受ける。ボン大学にて神学博士の学位を得た後、1923年ボン大学、ブレスラウ大学神学教授、ベルリン大学客員教授、1939年ナチス政権によって免職された後、1945年チュービンゲン大学教授、1948年ミュンヘン大学教授を歴任する。彼は、カトリック神学者・宗教哲学者として高名であり、ミュラーにより「現代ドイツの良心」とまで呼称されるほど、その円満な人格と深い学識は戦後の世代に大きな影響を及ぼしたという。そして、当時の多くの思想家が過去の伝統を否定したり、時代の病弊を指摘することに専心するなかで、彼はルネッサンス以降の近代精神とそれらがつくりあげてきた当世の現実を透徹して見詰め、高い精神的視点に立ってその時代の本質を鋭敏に分析しながら、尚も人間が進むべき道を指示する、稀なる肯定の思想家であるといわれている¹²⁾。

ところで、Guardini, R. は、決して安寧な時

代を過ごしてきた訳でなく、時代の荒波の中で、あのナチス政権下において生起した歴史的悲劇に遭遇していった。これによって、彼は、二度にわたる大戦の凄惨さや醜悪さ、そして悲惨さから、近代以降のそれまでの人間学的認識に懐疑の目を向けることとなる。彼はそのような懐疑や危機意識から出発し¹³⁾、実存哲学と教育学の理論的關係を論究しながら、新たな人間学的認識に支えられた教育学を模索していった¹⁴⁾。そして、彼はそのようにして導かれていった深い人間理解と世界観に基づきながら、人間の実存的な可能性を問いつつ、教育の本質についての論議に関わっていったのである¹⁵⁾。前述のごとく、教育学における人間学的論議は、その実存哲学的な拡がりから新たな局面を迎え、そして豊かな拡がりを得ていく。このような意味において、彼の人間学的論議とその学的成果は、教育学における人間学的論議においては、看過し得ない重要な知的契機の一つであろう。これらを踏まえつつ、ここから彼の教育学、とりわけそこにおける人間学的論議に立ち入ってみることとしたい。

2.2. Guardini, R. の教育学とその人間学的論議の出発点

Guardini, R. の教育学論議は、近代批判から始まる。所謂、近代という時代は、学の自意識が高揚し、諸科学がこぞってそこに純粋に内在する存在根拠を求め、ひたすらそれらの「自律性」を基礎づけることに専心してきたという¹⁶⁾。平野は、それをまさに中・近世の呪縛から解放されて、自らが主人公となった近代人の感情の表れ的一端でもあったと表現する¹⁷⁾。彼は当時を「まさにそれは、それまで閉ざされていた深まりから湧き起こってきた熱狂的な爆発のようであった」と振り返る¹⁸⁾。そして教育学もそのような流れにあっては同様の道を辿っていた。即ち、教育学も、学の自意識の高揚の中で、例えば医学、政治、倫理や社会等といった他の領域から際だって独立した「真に教育学的

なるもの Rein-Pädagogische」¹⁹⁾や、「特別に教育的なるもの Spezifische Pädagogische」²⁰⁾を追求していったのである。

ところが, Guardini, R.によれば, 教育学は, このような自律性追求の流れの中で, 特別に教育的な価値を純粹に取りだそうとはせず, 人間の陶冶過程 Bildungsvorgang を様々な領域, 例えば認識的なものや, 倫理的なもの, そして生物的なものといった各々の領域のもとに分断的に配置してしまった²¹⁾. そもそも, 教育学における自律性の追究は可能なのか, それ自体が問題とならざるを得ない. 彼は, 教育学をも含めて, 多くの文化領域が「恰も勿体ぶったような特殊分割」によって独自の領域を求める中で, 人間の生が全体目的や連関を喪失して, ただ部分的な目的に安住しようとするところに明白な誤りをみるのである²²⁾. 彼は, 近代の人間理解が, 人間を多くのカテゴリーに閉じ込める試みが絶えずなされてきたにせよ, 結局のところ, 何ももたらしてくれなかったと述べる²³⁾.

従って, とりわけ教育学においては, その学的認識における人間の存在と生の分断的崩壊は許し難い. 平野によれば, 当時の教育学のそのような自律性の追究は, 人間存在の全体性についての否定を惹起するものであるから, それらが如何に学問的な形式と論理を備えていようとも, そこで把握されるものは, 真の人間の姿ではなく, 偏った姿であるという²⁴⁾. 自ずと教育学における当時の人間学的論議は, 不完全であり, そして人間の根本や全体を見誤っていたと言わざるを得ない²⁵⁾. Guardini, R. は, 教育学におけるそれまでの人間学的営為に対して手厳しく回顧する.

「(これまでのあのような教育学は) 人間を口にはしてきたが, 実のところ, 人間を真に見ていなかった. 人間に向かって動きはしたものの, 実のところ, 人間には, 真に到達していなかった. そして, 人間の周りをせっせと動き回っていたが, 実のところ, 人間を真に把握し得ていなかったのである.」²⁶⁾

2.3. Guardini, R. の人間学的論議とその展開

2.3.1 人間学的論議の第一段階

Guardini, R. の人間学的論議は, その出発点を, 人間学的認識における人間の存在と生の分断的崩壊への憂慮に起因する近代批判に置いていた. 彼は, 教育学においては, 多くの対象領域から構成される統一体としての人間の実存の全体性 Totalität der menschlichen Existenz に対する適正な感覚こそが重要であると考えた²⁷⁾. ただし, 彼はそのような人間の実存の全体性は, 絶対的な自律性の追究からは導かれ得ないと述べる²⁸⁾. 教育学において, 取り分けその人間学的な論議において見極められるべきものは, 人間の存在と生の構成要素ではなく, 何よりも人間の根本であり, そして人間存在の全体である. なるほど人間は有用な価値の単なる寄せ集めではない. そこで, 彼は自らの人間学的営為において, 近代の人間学的認識がもたらした人間の存在と生の諸要素への分断的崩壊に統一性と全体性を付与するために「絶対的な自律性を相対的なものへと組み入れること, 即ち, 一時的な分離からその本質に適合した全体の秩序へと到らしめること」²⁹⁾を試みる. ここから, 人間存在の全体に秩序と統一性を与える人間の本質が問題として立ち現れてくることとなる.

さて, Guardini, R. は, 人間存在の本質を追求していくなかで, やがて人間の生に着目することとなる³⁰⁾. そして, 彼は, 人間の全ての生は生成という形式 Form des Werdens において存すると考えた³¹⁾. さらに彼によれば, 生成とは常にうちなる本質 inneres Wesen の実現である³²⁾. 従って, 人間存在の本質は, 生成において実現される. これによって彼は人間存在を生成から捉え, その根底となる人間のうちなる本質に目を向けたのである. そして, そのような探究方向において, 彼はやがて像『Bild』という考え方に到達する. 彼は次のように述べる.

「それまで求めていたものは、次の方向にこそある。即ち、それは像 Bild（という考え方）である。最も大切なことは真理認識でも、倫理的な善さでも、美的-生物学的な人類としての適応性、そして有用性等ではない。そうではなくて、むしろ決定的なことは、人間は像から形成されているということである。人間はまさに全き本質において一つの像なのである。しかもそれは人間のうちにあり、そして啓示を与えるものである。像という契機によって、各々のもの、例えば知識や倫理的形式や人類としての適応等といった個々のものが、人間形成の特性においてようやく位置づけが与えられるのである。」³³⁾

人間のあらゆる部分や諸々の要素は、像に連関づけられ、それによって人間存在は全体性を得る。このような Guardini, R. の試みによって、教育学における人間学的認識が、ようやく相互に連関を失った個別の対象の数々への分断的な崩壊を回避し、その相対的な自律性の獲得によって確かな全体的基礎付けを得るのである。平野によれば、像は部分を統一する全体であり、部分は像の中で本来の意味を持つという³⁴⁾。従って、像は、統一体としての人間を本質的に規定する³⁵⁾。ただし、それは必ずしも現実世界に対する直接的な実利性や、即物的な有用性を持つわけではない。Guardini, R. は次のように述べる；

「像は、（その存在において彼自身を）そこに導いてくれるような根本現象であるに過ぎない。ただ、それが確かに存在者の存在現象を規定するとしても、それは単なる抽象性としてではなく、寧ろ明白な統一性 Einheit として存在するだけである。例えば、全体における一つの契機は、それだけでは単に独自で完結するような程度の意義を有するに過ぎない。また、単一性の雑多な全体は、単にそれ自体のものでしかない。（そうではなくて）像というものは、数多くのものからつくりあげられた統一体であり、それらがちょうどそれだけ調和的に溶け込んでいる、そのような意味あふれる人間存在の本質である。それ故に、像とは、人々の存在規定に対して本質的である。そして、人間の存在形姿 Seinsbild は、この限りにおいて、その具体的な実存 Existenz の構造を示すのである。」³⁶⁾

従って、像は現実社会に対する実利的・即物的な全体性ではなく、多くの契機の調和的な統一によってつくられている存在形成の可能性である。それ故に、像は、その存在の基底に可能性の統一体として存し、人々の存在現象を根源的に規定する。この像のありようやその限界において、人々は多様な存在形式を実現し得るのである。

さて、Guardini, R. に従えば、像には多様な種類があり、人間の像以外にも、例えば原子や結晶等の無生物における像、そして所謂、動植物における像もあり、それらの相異は、それを実現していく力、即ち主導性 Initiative にあるという³⁷⁾。そして、彼は、人間の像に特有な主導性を、精神 Geist にみる³⁸⁾。彼の神学的な比喩によれば、精神とは神によって個々人にそれぞれ特有のものとして造られたものであるという³⁹⁾。そして、桜井は、そのような精神が存在の内に住まいつつ、その創造的な主導性によって自己を構成し、維持し、主張し、そして達成すると述べる⁴⁰⁾。この時、人間の生成は、単なる造られたるもの Geschöpf から神性の領野へと高められ、個々人をそこから神との関係 Gottesverhältnis へと押しやる⁴¹⁾。この意味において、彼は、精神のこのような主導性の出発点を、まさに神から人間へと発せられた救済意志 Heilswillen にみる⁴²⁾。それ故に、像は、精神それ自体の自律からではなく、創造的で定律的な神の意志 schöpferischen und gesetzgebenden Willen Gottes に対する関係から生ずるという⁴³⁾。ここから、彼は人間を「神に呼びかけられた angerufen 存在」とみなすのである⁴⁴⁾。従って、人間は神に呼びかけられながら、精神の創造的な主導性によって、神性の領野へと高まりゆく。平野は、そのような精神の創造を、神性の高みを希い、そこへと向かおうとする像の能動的な運動として読む⁴⁵⁾。そのような精神の創造によって、人間は像において神へと漸近していく。そこで、彼は人間の像を「神の似姿『Ebenbild Gottes』」に喩えるの

である⁴⁶⁾。それはまさに人間の存在の最奥に育まれ、そして住まううちなる神とも言える。それを彼は次のように表現する；

「私は生きている。そうであるのに私のうちには私ではないキリストが生きている。」⁴⁷⁾

人間の像は「神の似姿」として、精神の創造を通じて神性の領野に迫りゆこうとする。それ故に、Guardini, R. の神学的な比喻を踏襲するならば、人間の存在形成の可能性は、高まりゆく「神の似姿」であり、それは常に神性の領野へと到達を希う上昇的な動機を胎動している。そして、そのような高まりゆく存在形成の可能性こそ、人間存在の本質をみることができる。人間の存在と生成は、そのような上昇的な存在形成の可能性に根源的に起因する。ここに彼は、教育学的なカテゴリーの基礎 *die Grundlage der pädagogischen Kategorie* として重要な契機を認めるのである⁴⁸⁾。それが、彼の人間学的論議における確固たる基底であり、その人間学的論議の第一段階なのである。

2.3.2. 人間学的論議の第二段階

Guardini, R. に従い、教育学における人間学的論議は、像という思考方法によって、取り敢えず、人間存在の全体性と根源的な統一性を保ち得ることとなろう。それは彼自身の当初の問題設定に対する一定の論理的な帰結と言い得る。ところが、彼は、ここで人間学的論議をやめずに、その先へと進むべく、自らが導いた人間学的認識に敢えて批判の目を向けていく。即ち、像という思考方法は、そこに内容的に固定的な内実を、その基準として与えがちであり、それが為、人間の主導性を弱め、新たなものの生成を妨げかねない危険がある⁴⁹⁾。確かに、そこには神性へと到る召命のようなものが予め先験的に想定されており、人間の存在と生成は、その思召しに従い肅々と進みゆくかのように捉えられてしまいかねない。平野は、そ

のような先験的な抽象化や形式的な固定化は、その人間学的論議において、現実において生成発展しゆく人間の具体的な時間的・空間的諸要素が無視される危険があると指摘する⁵⁰⁾。Guardini, R. は次のように述べる；

「それ自体に閉じられた人間の本質形態は存在しない。また、人間の生成に前もって与えられる内容というものも存在しない。あるものは、ただ生成する人間 *der werdende Mensch* であり、そしてただ事物に彩られた現実の（生の）空間のみである。」⁵¹⁾

やはり、それがいかに有効な契機であるとしても、像という思考方法のみでは、人間の存在と生成の真なる姿を把握し尽くすことは難しい。そこで、Guardini, R. は、人間の存在と生成を、改めて二つの原理、即ち形式 *Form* と実質 *Fülle* から説明しようとする⁵²⁾。即ち、人間の存在と生成の具体的現象は、これら二つの原理の相互規定の結果とみる。そして、あらゆる生の出来事は形式を通じた実質への刻印 *Prägung* であり、実質における形式の表現 *Ausdruck* として捉えられる。そこで、彼は人間の存在と生成をより正しく把握するために、人間存在の実質的・具体的な表現として存在形成に着目する。

さて、人間の実質的・具体的な存在形成は、当然のことながら、現実世界においてなされる。そして、そのような現実世界は、行為能力を有する人間や事物等、多くの要素から構成されている⁵³⁾。Guardini, R. は、人間を、現実世界のそのような構成要素のなかで、自らによって主導的に構成し、そして自らの生を表現していく特有の存在であると考え⁵⁴⁾。従って、現実世界の具体的状況において顕現する現存在は、そのような生の表現としてみるができる。ところが、現存在はその全てが必ずしも主導的な生であるわけではなく、具体的状況に制約を受けながら、受動的なものあるいは利他的なものに留まっていることもある。

そこで、Guardini, R. は、そのような現実世界において、人間が自らの主導性によって自由に存在形成を試みる時に、人間の存在と生成にとって重大な出来事、即ち『邂逅 Begegnung』が生ずることがあると述べる⁵⁵⁾。即ち、そこにおいて主導性を有する「私」が、それと同様にそれ自体として構築し主導性を有する他者や、それ自体のやり方で具体的に存在している諸々の事物に立ち迫られ、それと直接的に対峙せざるを得ない状況に直面するのである。これが彼の述べる邂逅である。それは単なる偶然に生起する突発的な状況以上の意味を有し、人間の存在と生成において極めて重要な契機となる。実に、人間の現存在とはまったく完全なものではない⁵⁶⁾。従って、人間がそのような状況下で現存在のままに留まっていたら、存在が圧迫されてしまう。そこで人間は、それを克服するべく、そこにおいて責任ある決断によって具体的な態度をとらなくてはならない。つまり、邂逅は人間に対してそれまでの不十分な生の根本的な転換を求めるのである⁵⁷⁾。平野によれば、邂逅において出会うものは、特段、人間に何をすべきかを指示するわけではなく、まずは人間を自己自身へと突き返し、自己自身の新たな決断を迫るという⁵⁸⁾。従って、人間は邂逅において現存在の日常的連続性を超越し得る存在形成を求められる。そして、そのような状況を克服するべく、決断によって存在形成を試みようとするとき、特有の生成が生起するのである。彼は、次のように述べる；

「邂逅 Begegnung において、(人間の存在のうちから) 何かが現れ出で来る。一回性の邂逅という状況においてのみ現れ得るものが、自らのうちからほとばしり出るのである。そのような一回性の決断 einmaligen Entscheidung において、『私』は生成する。そこにおいて運命も充実する。人格 Person—まさにこの人格とは、自らが責めを負い、邂逅を創造的に克服するうちにこそある。そして、そのような生成の瞬間はいつのまにか通り過ぎ、また新たな生成の瞬間が近づいてくる。それが全てなのである。」⁵⁹⁾

即ち、人間は無色透明な存在形成の可能性それ自体ではなく、現実世界において具体的な現存在を呈している。しかしながら、日常の連続性にあるそのような現存在が必ずしも存在形成の可能性を正しく実現しているとは限らない。ところが邂逅においては、その状況の克服をかけた一回性の責任ある決断によって、存在形成の可能性がその生に然るべきかたちで実現されていくことがある。Guardini, R. は、そのような生成を泉から湧き出る水流に喩える⁶⁰⁾。まさに、邂逅における一回性の決断において、それまで豊かに耕されてきた存在形成の可能性という泉から新たな「何か」が迸り出で、それによって新たな自己が具体的な形式で実現されていく。この時、人間は現存在を超えて自己へと生成するのである。まさに、人間はこの新たな自己の生成によって、状況を克服していく。邂逅における新たな自己の生成こそ、実存の成就である。つまり、人間の究極的な中核、即ち自己 Selbstあるいは実存 Existenz は邂逅においてのみ現れるものであり、これによって人間存在においてまた新たなことが始まっていく⁶¹⁾。そして彼は、そのような人間存在のありかたに人格を認めるのである。人格は単なる現存在と同値ではない。人間は何となく流れる日常性に埋没して主体性を失いながら浮遊していることもあり、現実的な状況において恒常的に人格として存在しているわけではない。彼は、そのような人間のありかたに人間の本来性を見いださない。むしろ現実においてそれを正しく見極め、責任のもとに主体的に判断しながら、自らの生を創りあげていく、そのような人格として人間存在を重視する。人格とは現実的状況における本質の実現であり、責任ある存在形成によってよってもたらされる実存的な存在形式である。従って、人格とは一回性のものである⁶²⁾。即ち、人格は現実的状況における実存の成就において存在するのである⁶³⁾。邂逅において人間は状況を生成的に克服し、人格として具体的な世界に自らの足で立つ。それが人

格的な実存である。

ところで、邂逅が人間の存在と生成において極めて重要な契機であるとしても、それは何れにせよ、現存在に対するある種の危機であることは否めない。そして、邂逅が主導性を有する他者や事物との対峙において生起する以上、そこにどのような可能性があるのかは予想がつかない。Guardini, R. は、それが迫り来るものと対峙であり、そこにおける一回性の決断による対決であるとして、存在形成を戦いに喩え、そこに全く測り知れない、そして予見し得ない可能性とともに、あらゆる崇高なるものや、悪意、没落、荒野、襲撃、恐怖、そして発見や征服、獲得等、そして勝利や破滅の可能性をもみる⁶⁴⁾。そこにおいて、対峙するものに屈すれば、自己が放棄され、そして消滅し、現存在から完全性が失われていくが、もしそれが真実で勇敢であり、それらに屈しなければ然るべき自己自身になれるのである⁶⁵⁾。勿論、そのような戦いの過程で失うものもあるだろう。しかし、それはあたかも試金石によって削ぎ落とされ得るような偽りのものであったのかも知れない。かくして、存在形成の戦いにおいて真なるものが堪え残る。実に、人間は邂逅において試験台に立たされ、自らの真性 *Echtheit* が吟味されるのである⁶⁶⁾。それでは、邂逅において、迫りくるものに屈することなく、それを克服し、よき存在形成を成すためには、何が必要となろうか。Guardini, R. は、それについて次のように述べる；

「人間には、主導性の力があり、心の純粋性があり、世界を受け入れ、そして世界へと出ていく勇氣、そして創造的なエネルギーがある。人間はそれらをもって克服するのである。いうなれば、つまり邂逅とは、自らの（豊かさ）の検証 *Bewährung* なのである。」⁶⁷⁾

従って、人間の存在形成という戦いには、簡便で有効な手だてなどはない。うちなる豊かさから発せられる主導性や創造的な力のみが頼り

である。Guardini, R. によれば、ただ、そこに身を投じ、そこで純粋にそれを受け入れ、自らの創造的なエネルギーによってそこを努め、その克服にむけて勇猛に歩みを進めるのみである⁶⁸⁾。そこに状況からの逃避やごまかしという着想は微塵もない。全ては自分の力で、自分の努力で、そして自分の可能性の全てによって、新たな自己を生成しながら、それを乗り越えていくしかないのである。従って、彼は邂逅において自らの人間存在の有限性を、さらには現存在の断片性や偶然性そして不完全性を受け入れ、そこから克服にむけて勇猛に前進していくことを求める⁶⁹⁾。人間は邂逅において一回性の状況を責任をもって受け取り、自らの欠落した部分を見つめ、その克服に向けて決断し、自らのうちなる豊かさによって独力で克服していかなくてはならないのである⁷⁰⁾。克服はまさに新たな生成をもたらしてくれる。その時にこそ、人間は新たな「何ものか」になれるのである。従って、彼は邂逅に神秘的な二面性 *geheimnisvolle Doppelseitigkeit* をみる⁷¹⁾。即ち、人間が自らの生を能動的に生き、そして特有の状況において創造的に克服しようとする時、そこには破滅の危機とともに、その形象の辺縁には、その出来事の片隅には、そして天命の傍らには、必ずや次なる新たな自己の存在可能性が、それと隣り合わせに立っているのである。邂逅はまだ見ぬ自己に光をあててくれる。そして、そこには人格的な実存の成就にむけた超越的な生成への可能性が常に存在しているとも言える。彼はここに第二の教育学的なカテゴリーを認め、それを教育学的なるものの動的な規定 *dynamische Bestimmung* と呼んだのである⁷²⁾。

2.3.3. 人間学的論議における第一の弁証法

ここまで Guardini, R. の人間学的論議における、像理論の静的規定性を補うための試みとして、その動的規定、即ち邂逅の論議を辿ってきた。平野によれば、そこには人間の有限性を覚醒させる実存哲学的意識と、近代教育学にみ

る甘美な主観主義的偏りに対する人間の実存という視座からの実存哲学的挑戦が認められるという⁷³⁾。

ところが、Guardini, R. はそのような動的規定の試みについても、その限界と危険に対して批判の目を光らす。彼によれば、やはり人間存在における一回性の実存が絶対的な真理であるというのは、やはり些か不遜な誇張であり、断片的でそこに何の生きた連関も認められないような理解では、人格の連続性や全体性が脅かされてしまう⁷⁴⁾。平山が述べるように、先の静的規定においては完全性や調和が強調されているのに比して、ここではどちらかと言えば断片性や悲劇性が強調されていることを否むことができない⁷⁵⁾。確かに教育学における人間学的論議においては、邂逅とその人格的な実存の成就が重要であるとしても、それを絶対視し、次の瞬間は虚無に陥落するといった悲劇的でありにも非連続的な存在理解には危険がある。

そこで、Guardini, R. は、人間学的認識における人間存在のそのような断片性と悲劇性を克服するために、それらの二契機の関係を思念する。そして、彼は、邂逅における存在形成という戦いの一つ一つが、有限かつ偶然なるものに見えるが、実は相対的なものであり、やがては人間存在の根本経験 Grunderlebnis の一部となっていくと説明する⁷⁶⁾。従って、人間が瞬間において如何なる存在形式を成就しようとも、それがどんなに瞬間的で断片的であっても、それは単なる刹那に留まることなく、存在形成の可能性へと算入されていくのである。換言するならば、それが如何に儚いものであるとしても、邂逅の克服によって成就する人格的な実存の質は必ずそのうちなる存在形成の可能性へと立ち還り、「新たなもの」の生成の可能性に組み込まれていく。そのような創造的な循環によって、人間存在における像と邂逅の相互方向的な連続性をみることができる。従って、平野が述べるように、一見してそこに明白な乖離が見受けられる静的規定と動的規定は、そこにお

いてある種の相互補完的な連関を獲得するという⁷⁷⁾。即ち、像と邂逅は対置しつつも、相互補完的な関係にある。彼はこれを「生き生きとした生成の第一の弁証法 das erste Dialektik des lebendigen Werdens」とした⁷⁸⁾。これについて、Guardini, R. は次のように述べる；

「教育学的に本来的なもの das Pädagogisch-Eingentliche は、まさにあれらの規定体系の双方の弁証法的な交点にある。それはある単一の概念をもって捉えられるのではなくして、寧ろ双方の概念の対置 Gegenüberstellung からのみ見えてくるのである。」⁷⁹⁾

2.3.4. 人間学的論議における第三段階と第二の弁証法

さて、Guardini, R. は、人間の存在と生成の真の姿に迫るために、自らの人間学的論議において、第一の弁証法へと到達した。ところが、彼はそこで論議を止めず、さらにその先へと進もうとした。即ち、彼は自らが導き出し得た、この第一の弁証法に対しても、謙虚に批判の目を向け、それに欠落するものを思念していったのである。彼によれば、第一の弁証法においては、生成する個人の同一性 Selbigkeit が、邂逅において特有の可能態から独自の現実態へと拡がっていくさまが表現されている⁸⁰⁾。即ち、それは、自らの可能性の範囲のみによって遂行される内在的な生成にすぎない。従って、彼は、第一の弁証法において注視されているのは、個々の人間のみであり、それはあまりにも個人中心的 egozentrisch に過ぎ、主観的で厳密な規定とは言えないと考えたのである⁸¹⁾。さらに、彼は、そこに身近な事物のみをして世界の全体と解釈し、その卑近な世界に潜む扁平さや稀薄さ、そして歪みさえも維持しようとするあまり、その存在の本質が貧困化していく危険をも認める⁸²⁾。考えてみれば、人間の存在と生成は、自らの内に閉じてはいない。従って、人間がその存在において堅強な内的完結性に自閉的に留まることなく、現にある可能性を

超えて伸展しゆく為には、外在的な契機との関係が必要となる。なるほど人間の存在と生成は、閉じた内在的主観性において進みゆくものではなく、寧ろ外界の現実性との相互交渉においてダイナミックに展開していくものなのかも知れない。

そこで Guardini, R は、人間の存在と生成をより適正に把握するために、あの弁証法的交点に対しても新たな契機を対置した。果たして、それは「対象 Gegenstand」であった⁸³⁾。ただ、それは先の「第一の弁証法」においては、像の実現の素材として扱われていたに過ぎなかった⁸⁴⁾。ところが実際は、対象が寧ろ即自的に価値を有し、人間存在に従属することなく自己目的的存在していることを正しく思念しなくてはならない。彼は、次のように述べる；

「対象 Gegenstand という概念においては、それ自体の激しさと、そこからの展開の自由が重要となる。即ち、対象とは生き生きと生成しゆく個々人の自己構成の単なる素材としてあるのではない。対象とは、寧ろそれ自体において存在する。つまり、その存在価値は客観的である。そして、それは常にその独自性のもとにあり、それ自体において、それがそれであることの価値についての揺るぎない意味が決められていく、そのようなものである。そして、対象は、人間に対して（その価値を）認めさせ、それへの没頭や尽力を要請する。」⁸⁵⁾

つまり、対象とは人間存在の従属的な素材ではない。Guardini, R. はそれを超個人的なものの全体であると述べる⁸⁶⁾。即ち、それは理念や規範のような何かにとって有用であるようなものではなく、寧ろそれ自体の正当性故に価値あるものから、所与の現実、例えば事物やものごとの過程、人間関係等そこに存在するものや、そこにおいて、あるいはそれらに即して生起する出来事、そして啓示において神へと向かわしめる宗教的な現実までも含む。そして、そのような対象は、人間に対してその自己の内的世界に欠落した価値を突きつけ、その存在の維持や保持に決定的な危機をもたらしながら、

取り入れられることを要求する。実に、人間は現実社会において多様な対象とそこから発せられる諸々の要求の中に存在し、そこにおいてこそその存在と生成の実質を押し進めているのである。ここで教育学的に重要なことは、対象に対する正しい関係である⁸⁷⁾。彼は、これについて、対象の要求に対して能動的であること、即ち、対象を正しく認め、そこから発せられる要求を理解し、それに従って努力する態度、即ち献身 Dienst として説明する⁸⁸⁾。無私つまり私性への執着を捨て、ただ対象に帰依 Hingabe するなかでのみ、決定的な出来事、即ち、対象が「私」のうちにおいて「何ものか」になるのである⁸⁹⁾。これによって、人間の存在形成の可能性は、さらに新たなものへと創造的に再構成されていく。

従って、対象への献身は、翻ってそこへの没頭の中から何かが生じ来る、極めて創造的な営為と言えよう。人間は、それによって対象を存在の独自の世界へと受け入れることができる⁹⁰⁾。桜井によれば、対象に没頭し、そこに自らがその存在の本質を与えることのなかで、対象の価値的な力が作用し、それによって自己の内に何かが生じ、新たな何ものかになりゆくという⁹¹⁾。そして、平野によれば、何かに無心に打ち込み、そこで精進を重ねることによって、人間は、そこに自己とは異なる独自のものを見抜き、それまでの偏狭な自己を棄て、外に自己を開示することによって、自己の本質の偏狭さと一面性が除去され、新たな自己が生ずるという⁹²⁾。また、杉谷は、対象の独自の本質、自分のそれと異なる本質に触れ、感動することによって自らの本質の狭さと偏りが取り除かれ、さらにはそれを真に自分のものとすることによって、新たな自己が生じ出るとみる⁹³⁾。即ち、対象への献身は、生成の可能性の拡大をもたらしてくれるのである。

これによって、人間の存在と生成は、自閉的で内的完結的なものに留まることなく、外に開かれた発展的な過程として描かれていく。

Guardini, R. によれば、対象への献身は、人間の存在と生成に何か新たな契機をもたらし、ひいては内実の豊饒化や、生の実質的な充実⁹⁴⁾、そして、それはさらに人間の視野や精神の拡充をももたらしてくれる⁹⁵⁾。例えば、慎みや勤勉、誠実さや責任、ものごとに対するまじめさから生ずる正義や思慮深さそして節度など、それらは対象に対する真の帰依においてのみ生じ得るという⁹⁶⁾。即ち、対象への献身は、やがて対象から何らかの贈与をもたらしてくれる。そのような対象とのかかわりは、それまで決して持ち得なかった契機を像に与えてくれるのである⁹⁷⁾。そのような外在的契機との創造的な関わりによってこそ、人間の存在と生成は、内在的主観性を突き破り、外へと可能性を伸展していくことができる。従って、彼はそこに先の第一の弁証法の構造的限界を克服し得る可能性を認めるのである⁹⁸⁾。

ところが、Guardini, R. は、この対象の論理に対しても、その限界を見極める⁹⁹⁾。即ち、対象がいかに人間の存在と生成に対して有効であるとしても、それらが人間に対して常に直接的に有用であるという保障は、必ずしも対象それ自体の中には存在しないが為に、それが無私の献身であればあるほど、混乱と破壊をもたらす危険をも併せもつ¹⁰⁰⁾。そればかりか、そこには対象の統一性を欠いた多様性によって人間存在がばらばらに引っ張られ、やがては自己喪失に陥る危険もある¹⁰¹⁾。人間は、対象との対決において、常にそのような喪失や混乱、壊滅の危険に投げ込まれているのかも知れない。そして、彼はそのような危険が現代にいますます現実となってきたと言う¹⁰²⁾。考えてみれば、人間の存在もそしてその生成も、その現実とは安易な道程ではない。境況が述べるように、人間は、現実との厳しき対決においてこそ生の実質を営んでおり、決して無害な「真空状態」¹⁰³⁾において生を安穩と遂行している訳ではない。従って、彼は人間の存在も生も、そして実存も、その実はそれが最高の可能性と同時

に、極度の危険にも晒されていると述べる¹⁰⁴⁾。

それでは、何が人間をそのような危険から守ってくれるのであろうか。ここで Guardini, R. は、対象の本質を見極めることの重要性を思念し、眼の開かれた存在 *Aufgetansein der Augen* に言及する¹⁰⁵⁾。平山が述べるように、この眼の開かれた存在とは、事物の本質を見抜くことができ、それによって人間は、そこから尽きることない豊かさを、つまり「神の永遠の力と神性」をくみ取ることができる¹⁰⁶⁾。そして、彼はそれを対象の対立項である、先の第一の弁証法の中に認めていく¹⁰⁷⁾。即ち、それはあの高まりゆこうとする存在形成の可能性の豊かさである。つまり、神の似姿としての存在形成の可能性は、迫りくる対象の激しさに翻弄されることなく、そこに秘められた神性を見極めてくれる。従って、それは人間のうちにある生き生きとした内的中心 *inneres Zentrum* であり、それは対象に対する生き生きとした選択原理 *Prinzip der Auswahl* であるとともに、諸対象の混沌から人間にとって正しい選択を行わしめる内的法則 *inneres Gesetz* であるという。そして、平野によれば、それは人間がよき対象を能動的に選択し得る内在的主観的要素であり、まさに「現存在を支える基底」であり、そして「最後の支え」であり、真の決断はそこからなされるという¹⁰⁸⁾。従って、対象との関係においては、決して受動的になることなく、自らのうちに耕された可能性に豊かさによって、対象の本質を正しく見極めることが必要となる。これによって、人間は対象と適正な関係を保つことができ、そこにおいて単に有益な対象ではなく、献身を要求し得るだけの正当な権利を有する対象を選ぶことができるのである¹⁰⁹⁾。

従って、確かに対象には神の恩寵の秩序から逸脱したものもあり、それらが人間を脅かしもするが、そのような危機と脅威の中にあっても、人間は開かれた眼をもってその対象のなかに勇気を持って入り込み、その特質を獲得しなくてはならない。なぜならば、平野が述べる

ように、それによってのみ、はじめて自己自身の真の新生を勝ち取ることができるからである¹¹⁰⁾。Guardini, R. は、個々人は「いま」「ここ」にいて、所与の事物の連関の中に存在しており、周囲の現実世界は、人間の存在を脅かしもするが、同時に人間の存在とその生成を支えていると述べる¹¹¹⁾。

さて、現実世界において人間は、対象と対峙するが、対象それ自体も自己展開していることを考えるならば、対象との関係において生起する献身は常に一方的であるとは限らない。対象に対する「私」の献身のみでなく、「私」に対する対象の献身もあり得る。その場合、「私」が対象に対してそこに欠落した豊かさを贈与することもあるだろう。これによって、対象それ自体もより豊かに再構成され得る。そして、よりよく再構成された対象は、翻ってより高次な対象として人間により高次の要求をすることであろう。従って、対象との関係においては、相互方向の献身と贈与も予想される。そこには可能性として半ば上昇的な循環構造が見て取ることができるように思われる。ただし対象への献身が常に一定の贈与を保障し得ないため、そこに確かな連続性を認めることはできない。従って、それは常に対置における相互方向的な緊張関係として示される。Guardini, R. はそれを「生成の第二の弁証法的緊張 zweite dialektische Spannung」として捉えるのである¹¹²⁾。

やはり、人間の存在と生成を正しく見極めるためには、そこで生の実質を営む現実の具体的世界を捨象することはできない。あたかも人間を脅かすかのように対決を迫り来る対象も、それによって自らに欠落したものを補い得る有効な契機を孕むが為に、翻って人間の存在と生成を支えてくれる。対象は、人間の存在と生成にとって重要な契機の一つである。人間の存在と生成はこのような外在的な契機との緊張関係によってこそ、外に開かれつつうちにおいて高まりゆく道程として描かれることであろう。

2.4. 人間学的論議における最終的な弁証法と人間の存在と生成の総体

さて、これまで辿ってきたように、Guardini, R. は、その人間学的論議における人間の存在と生成を弁証法という思考方法によって捉えようとしてきた。彼の用語法における弁証法は、所謂、哲学史上において用いられているヘーゲルの流れにあるものではなく、そこにはそれらの差異の単なる統合や混合、一致が予定されているわけではない¹¹³⁾。彼の弁証法は、相互に独立しつつも前提しあい、双方の限界を補うような深い統一 tieferer Einheit へと連関する対置構造をさしているのである¹¹⁴⁾。そして、彼は、そのような対置という思考方法こそを現実的であると考え¹¹⁵⁾。即ち、それはまったく閉じた体系ではなく、むしろ生き生きとした人間存在の内的方向を映し出しており、人間が自らを失うことなく超越し、そして充たされていく特有の空間を正しく表現し得るという。彼は、人間の存在と生が、この対置における両側面、即ちその二面性 Zwei-Seitig においてのみ存在し得ると述べるのである¹¹⁶⁾。そこで彼は、それらの二重の弁証法によって、人間の存在と生成の全体構造を捉えようとする。彼は、それを「最終的な弁証法 die Endgültige Dialektik」¹¹⁷⁾と表現した。そして、彼はそこに教育学的に本来的なるものをみて、次のように述べる；

「教育学的に本来的なるものは、あの弁証法的な連関の展望点 Perspektivpunkt にこそあり、それは『対象』と『献身』という契機による新たな弁証法的連関において立ち現れる二重の関係において生き生きと見えてくるのである。即ち、教育の内在的な契機は、『像』と『邂逅』の対置においてそれ自体を構成しながら、それを越えた超越的なもの、つまりは『対象』とそれへの『献身』に対置している。まさに、教育学的に本来的なるものは、そのような系列の展望点にある。それを理解することによって、究極的な教育学的認識が得られるのである。」¹¹⁸⁾

Guardini, R. は、人間の存在と生成の全体構

造を二重の弁証法の連関関係によって描こうとした。即ち、それは像と邂逅との緊張関係によって描かれる第一の弁証法と、それに対置する対象との緊張関係によって描かれる第二の弁証法とによって構成される二重の弁証法である。そして、教育学的に本来的なるものはそれを正しく見通し得る展望点にある。従って、教育的において重要なものは、まさに人間の存在と生成への正しい視野である。この意味において、この展望点こそが教育学的認識の本質的な拠点と言えよう。

さて、Guardini, R. のこのような人間学的提起は、前述の如く、近代の教育学における人間学的認識の分断的崩壊に対する批判であったが、それは同時に、排他的な陶冶思考に方向付けられた近代の教育学の一面性に対する批判でもあった¹¹⁹⁾。即ち、彼は当時の教育学における人間学的認識において、具体的な個々の事物に態度をとり、特定の状況に存在し、その状況を把握し、そして克服しなくてはならない、そのような具体的な個々の人間が決定的に見落とされていたことに気づいたのであった。そこで彼は、平野が述べるように、その人間学的論議において、それまで見落とされていたところについても正しく見極め、人間の存在と生成の真の姿をみようとしたのである¹²⁰⁾。そして、彼のこのような人間学的提起は、当時の教育学界に影響を与え、新たな論議を引き起こしていくこととなる。即ち、それはあの二重の弁証法を構成する三つの契機の順位性の問題であった。確かにそれは重要な問題である。桜井によれば、実際、当時の教育学界では、その統一方法において、おのおのの契機を等価に扱うか否かといった問題が立ち起こり、取り分け Döpp-Vorwald, H. と Klafki, W. の間で、およそ次のような論争が巻き起こったという¹²¹⁾。そこにおいて、Döpp-Vorwald, H. は、それらの同価値的な並列性を批判し、邂逅のみを人間生成の意味と教育目標を完全に表現するものとして他の契機を第二位的な地位に置き、「教育的に本

来的なもの」の規定から排除しようとした。これに対して Klafki, W. は、Döpp-Vorwald, H. の実存主義哲学的な先鋭化に潜む成熟した人間にのみ可能とされるような教育的基準性を批判し、成熟への援助に対しても教育の意味を見出し、その原理的性質の教育学的動向に対する整合性をもって Guardini, R. の立場を支持した。何れにせよ、それらの論議の内発的な勃興の事実、桜井が述べるように、Guardini, R. によって導かれた人間学的提起とそれらの契機が、教育学において、とりわけ人間の存在と生成についての人間学的論議において、看過し得ない極めて重要な意味を有することの正当性を裏付けるものとして理解される¹²²⁾。ちなみに、これら三つの契機の取扱いについて、彼自身は順位性の論議を留保するようなかたちで、次のように述べている；

「そこに描き出された三つの立脚点は、その都度、他の構造契機に依拠されることとなる。それらは、三つの教育学的な可能性 *Möglichkeiten des Pädagogische* を表現するのである。ただ、それらはそれ自体で可能なのではない。そこにはそれ自体の限界に起因する不可能性が含まれている。従って各々は、他の契機に対する対置 *Gegenspiel* を必要としている。とはいっても、それらの何れかに重点を置くかについては自由である。

『像』の概念に重点を置くのか、あるいは『邂逅』に、または『献身』に置くのか、それは決断にかかっている。それによって、(教育学的な) 存在と世界の構造が異なってくる。」¹²³⁾

Guardini, R. は、各々の契機の順位性については論じてはいない。これによって、彼の人間学的論議は、形式上の中立性を保持しているようにも思われる。ただし、それらの三契機の何れかが強調されることによって展望点の位置が相違し、異なった全体的調和のもとに教育学的認識が構成されていくこととなる。しかし、それらのどこに重点を置こうとも、必然的に他の二契機を随伴し、それらに少なからず依存する。この重点の調和と均衡によって教育学の内

実が構成されていくこととなる。彼はその人間学的論議の中立性において、そのような教育学的構造の可動性を保障しているとも言える。

そこで、Guardini, R. の人間学的論議に従い、人間の存在と生成の総体を中立的に構造化してみたい。まず、人間の存在と生成の総体において、それらの構成上の三契機を等価に位置づけることとする。これによって、人間の存在と生成についての理論構成は、さしあたり二つの弁証法が相対的に対置されながら、調和が保たれている状態が想定されていく。ここから、平山が述べるように、人間の存在と生成の総体は、その三契機を各々の点とする三角形の連関として描かれ、さらにはそれらの二重の弁証法を正しく眺望し得る点を頂点とした三角錐が構成されていく¹²⁴⁾。即ち、その底面の三角形は、第一の弁証法を底辺とし、第二の弁証法を高さとして構成される。それは、まさに三つの契機から構成される三角形であり、双方の対置依存関係をも明示する。そして、その底辺においては、可能態から現実態へと拡がりゆく生成における検証と克服という内在的な緊張関係、さらにはその高さにおいては、選択と献身という外在的な緊張関係とともに相互方向的な贈与という外在的な緊張関係が明示されることであろう。さらに、三点とそれらの対置的で相互補完的な連関を正しく見通し得る展望点から、人間の具体的な生の全体性 *Totalität des konkreten Lebens* の真実が明瞭に映じてくる¹²⁵⁾。教育学は、この展望点から人間の存在と生成の総体を普く射程に包括し得る、本質的な視野を得ることとなる。これによって、Guardini, R. の「教育的に本質的なもの」の最終的な規定へと到達するのである。彼は、次のように述べる；

「ここには人間の生の全体に対する確かさがある。また、ここには人間の生の個別の瞬間あるいは独自の状況に対する確かさもある。これ以上のことはもはや言い得ない。即ち、ここにも、教育学的に本

質的なものの規定 *Bestimmung* を論ずることができるのである。」¹²⁶⁾

Guardini, R. はその人間学的論議において、人間の存在と生成の総体を構造的に素描した。平山は、彼の明示したこのような広大な理論を、現実世界において無限を求めて生きる有限なる人間の存在と生の現実を、まず根底から捉え、その存在と生成の本質を一步一步探究しつつ構築した手堅い理論であると評価する¹²⁷⁾。そして、桜井は、彼のそのような人間学的論議に、現実世界において生を押し進め、そして状況において克服的・創造的に生成する、そのような人間の存在と生成のダイナミクスについての鋭敏な熟慮をみるのである¹²⁸⁾。ここに、彼の人間学的論議の学的有効性が窺われる。教育学はこれによって人間の存在と生成の総体を照射することができ、人間形成理論の基礎に確かな人間学的視野を提示し得ることとなる。

2.5. 体育学の人間学的視界と体育における人間の存在と生成の総体

体育は、教育の一形式であり、身体活動や身体運動を媒介として人間形成に寄与しようとする営みである。そして、学校体育とりわけ教科体育においては、教育的視点から選定された身体運動文化の具体的形式が教材として用いられ、そこでは一定の教育目的に従って、児童や生徒等が体育教員の指導のもとで、それらの諸形式と関わっていく。体育の基本的な構造が教育に類比する以上、その教育としての特性等の論議は、おおよその場合、媒介財であるところの身体運動文化に向けられていくように思われる。無論、ここで、身体運動文化が広く文化一般においてどのような独自性を有するのかについての厳密で詳細な議論に立ち入ることはできないが、少なくともそこには他の文化領域と共有する要素とともに、特徴的な要素が存在するのではないだろうか。例えば、身体運動文化は、多くの場合、人間の身体運動において全人

的な直接体験をもたらしてくれる。プールで潜水したり、鉄棒にぶら下ったり、山頂をめざして険しい山道を登り進んだり、それは全ての場合、認識のみではない、思考のみではない、かといって身体のみではない、個々人の全ての可能性と生の全体によって果たされる全人的な直接体験である。そして、そのような全人的な直接体験は、自らの身体を生理的・物理的な構成態から意味形成的に解放してくれるのではないだろうか。体育において彼らが疾走し、跳びはねるとき、それは単なる物理的運動に全く回収され尽くすとは考えられない。体育において彼らがゲームに没頭し、一喜一憂している姿は、単なる文化の習得で言い尽くすことはできない。そこには、身体運動の全人的な直接体験を通じた価値＝意味世界への拡がりが認められることであろう。このような全人的な直接体験の保障は、身体運動文化の絶対的な独自性ではないにせよ、その確固たる特徴の一つと考えられる。体育において顕現する人間の生は、おおよそ場合、そのような特徴を有する身体運動文化と関わりながら、顕現してくるように思われる。そうであるならば、体育学は人間学的論議において、人間存在をそのような身体運動文化との関わりから照射していくことも必要となろう。そのような学的営為は、その人間学的論議において、体育に特有の拡がりを明示してくれるように思われる。

さて、体育において児童や生徒は身体運動文化との関わりからも多様な存在形式を顕現する。例えば、彼らは、体育という具体的な状況において、ゴールをめざして走り、バーを跳び越えたり、ボールを追いかけて、また競い合いもすることであろう。それらは体育における彼らの具体的な生の一つ一つの現象として捉えることができる。そして、Guardini, R. に従い、体育における彼らのそのような生が生成という形式において捉えられていくならば、体育における人間の存在と生成の総体も、生成の二重の弁証法から構造化されていくこととなろう。そこ

で、彼の人間学的論議の段階に即して、体育における人間の存在と生成の総体についての検討を試みてみたい。

まず、体育における人間の存在と生成は、Guardini, R. に従い、第一の弁証法から把握されていくこととなる。それは、基本的には、体育において個々人が可能態から現実態と拡がりゆく内在的な生成を指す。体育においても、個々人は、特有の生成史を有し、独自の可能性を秘めながらそこに存在している。そして、個々の身体機能の発達程度や身体運動経験の程度に応じて、その身体操作技能に関わる可能性は多様である。また、それは身体運動経験によって開拓された価値＝意味的な実質にも規定され、ある種の心理的な嗜好性や拒絶的な姿勢、または価値や意義そして意味を感知し得る感受性と、その感じ得る楽しさの質等も、個々の存在形成の可能性を構成している。あわせて、身体運動文化に直接的なかわりを有しない様々な人格的な可能性、たとえば個人の内面に構築される独自の価値＝意味世界や対人関係技能等もそれを構成している。体育における人間の存在と生成は、そのような存在形成の可能性を基底とする。そして、体育における各々の生の現象は、個々人のそのような存在形成の可能性から湧き出るのである。このように考えるならば、体育においても個々人は、その存在の根底において存在形成の可能性の統一体として捉えられることであろう。

さて、体育においても、人間は単なる無色透明な可能性としてそこに存在しているわけではなく、その具体的な状況において生を実質的に押し進め、具体的な現存在を呈する。例えば、彼らはゲームにおいて勝利に歓喜したり、惜敗に涙したり、友人の卓越した達成に驚嘆したり、不意なチャージングに思わず激昂したり、その日常的な連続性において多様な現存在を呈している。ただし、体育におけるそのような現存在も、必ずしも存在形成の可能性を正しく実現しているとは限らない。

ところが、体育においても、その具体的状況において個々の人間がその主導性によって存在形成を試みるときに、体育状況の現実世界にある他者や事物、具体的な状況と出会い、それらと対峙せざるを得ない状況に直面することがある。それが邂逅である。体育においても、彼らの現存在はまったく完全なものではない。従って、体育におけるそのような状況においても、現存在のままに留まっていたら、その存在が圧迫されてしまいかねない。体育においても、彼らは邂逅においてそれまでの不十分な生の根本的な転回が求められ、現存在の日常的連続性を超越する存在形成に迫られることとなる。そこで、その状況を克服するためには、そこにおいて責任ある決断によって存在形成を試みなくてはならない。そして、彼らがそれを克服にむけて努めようとするとき、彼らの存在形成の可能性から何かが現れてくる。体育においても、邂逅における一回性の決断において、それまで豊かに耕されてきた存在形成の可能性から新たな「何か」が迸り出で、それによって新たな自己が具体的な形式で実現されていくのである。これによって彼らはその具体的状況を克服し、自己へと生成する。それは、人間の究極的な中核、即ち自己あるいは実存の実現である。その時、人間は人格として体育の具体的な世界に立つのである。体育においても、人格は単なる現存在と同値ではない。それは本質の実現であり、責任ある存在形成によってもたらされる実存的な存在形式である。体育においても、人間は邂逅において実存へと生成し、それによって人格を成就することができる。

例えば、体育におけるスポーツ状況での責任ある決断によってもたらされた「私のプレイ」の一つ一つも、うちなる可能性の人格的な実現であると言える。また、より上手な相手とストロークを行うなかで、よりよいリターンを試みながら工夫を試みているなかで自らのうちから何かが拓かれていき、それによってそれまで存在形成の可能性に秘められていたものが、具体

的な形式となってその存在に実現され、不十分な現存在を超えて、よりよいストロークを達成していくこともある。その時、彼は新たな自己へと生成するのである。また、あるスポーツ場面における協力や協同という状況において、自らが心を開いてそこに関わっていくなかで、現存在の日常的な感覚を超えて、仲間へのさらなる信頼が湧き起こってくることもあろう。その時、彼は、より豊かな自己へと生成するのである。また、拮抗した勝負状況を克服して競り勝った瞬間、彼のうちから歓喜が湧き起こり、それを人格的に表現することであろう。あるいは、愚かな野蛮行為に直面したとき、彼のうちに秘められた豊かさから逆説的な形式で嫌悪が湧き起こり、それを人格的に表現するかもしれない。さらに、体育において得られる至高経験や没入、融和経験、そして達成等も、体育において現存在の日常的な連続性を超越して成就する人格的な実存の一形式であると言えよう。体育においても人間はその可能性において邂逅とそこでの克服を通じた超越的な生成に開かれているように思われる。

ところが、体育においてもそのような生成は、決して永続的なものではなく、瞬間的に成就しては瞬間的に崩壊していく。勝利の歓喜による瞬間的な飛翔は、やがて日常的な現実へと連れ戻される。ところが、それが瞬間的で儚いものであるにせよ、人間の生成においては有意義な契機となる。即ち、体育においても、そのような人格的な実存の成就是、単なる脈絡のない全く断片的で刹那的な現象ではなく、そして次の瞬間に虚無に沈みゆくのではなく、ある価値契機を携えて、存在形成の可能性へと立ち還っていく。例えば、体育におけるスポーツの直接体験において湧き起った大いなる感動は、次の瞬間に全くの虚無に帰するのではなく、特有の価値契機を携えて独自の存在形成の可能性に立ち還り、そこを豊かに耕してくれる。これによって、彼らは存在形成の可能性を高め、より豊かな人間への生成が可能となる。即ち、体育に

おけるそのような人格的な実存の成就も、人間を新たな生成の途へとつけてくれるのである。そして、それが体育において成就した生成であるとしても、それによって可能となる新たな生成は、体育という枠内に限られることなく、それを越えた現実社会一般においても可能となることであろう。ただし、敢えて体育の枠内に限定するならば、それは体育における人間の存在と生成の第一の弁証法として捉えられよう。

さて、体育における人間の存在と生成における第一の弁証法においては、体育における個々人の可能態から現実態へと到る生成をみてとることができる。ただし、やはりそれは内在的に過ぎることは否めない。考えてみると、体育においても、人間の存在と生成は、自己完結的で全く自閉的なものではなく、実際は、具体的世界における多様な構成要素との作用関係のなかで、生の実質を展開していることを想起しなくてはならない。従って、体育学が体育における人間の存在と生成を正しく把握しようとするならば、その具体的世界との関わりをも視野に入れる必要がある。

そこで、体育学における人間学的論議においても、第一の弁証法の内在的主観性を克服するために、体育における人間と外在的契機との関係を正しく思念しなくてはならない。これによって、体育における人間の存在と生成は、Guardini, R. に従い、改めて第二の弁証法から把握されていくこととなる。それは、基本的には、体育における個人の内在的な生成と外在的契機との緊張関係を指す。体育においても、人間存在は内在的に閉じていることはなく、その具体的世界において外に開かれており、多様な超個人的な構成態や状況、例えばさまざまな理念や規範、あるいは所与の現実、出来事や人間関係のなかに、個々の存在と生成の実質がある。そして、体育の具体的状況において、例えば、さまざまなスポーツ規範やボールを奪い合いながらのスポーツ的現実、チームメイトへのパスを阻もうとする相手プレイヤー、迫り来る

痛烈なショット、相手プレイヤーのフェアな試合態度、あるいは卓越したプレイに対する心からの賞賛、ゲーム場面で相手を罵るような口汚い暴言、反則すれすれのダーティーなプレイ等、それらも対象として個人に迫ってくる。ただ、それは同時に存在の維持に対するある種の危機でもある。彼らは、そのような対象とはできれば関係をもたず、存在維持の危機から逃避したいと考えるかも知れない。しかしながら、人間の生成が外界との関係を断ち、内在的な自己展開に留まるならば、やがてはその本質の貧困化を招きかねない。そこで、人間の生成が、自閉的で内在的な自己展開を超えて可能的に伸展していく為には、やはり外在的契機との関係をもたなくてはならない。従って、体育においても、迫りくる対象を正しく認め、勇気を持ってそこに自らを投げ入れ、私性への執着を捨て、それに無心にうちこみ、そこで純粋に努力することが求められる。なぜならば、体育においても、そのような無垢な努めによってこそ、対象が「私」のうちにおいて「なにものか」になり、自分の偏狭さと一面性が除去され、可能性が広げられていくからである。体育においても、頑張ること、努力することは、例えば技能的な向上のためだけではなく、むしろ自らの可能性の拡充に繋がっていくのである。

ただし、体育においても、そのような対象の全てが人間の存在と生成に対して必ずしも即時的に有効であるとは限らない。そこにはよき対象のみならず、中には存在を混乱させ破滅に陥れるものも存在することは否めない。従って、体育においても、人間は、自らの存在を守るためには、よき対象を選択しなくてはならない。そのような選択は、まさに先の第一の弁証法に内在する存在形成の可能性の豊かさによってなされる。即ち、それが眼の開かれた選択原理として、体育の具体的状況において、そのプレイのよさや、あの振る舞いの崇高さや醜悪ささえも感知してくれる。これによって、人間は体育においても、迫り来る対象からその本質を見抜

くことができる。そして、それへの無垢な献身と努力を通して、そこから尽きることのない豊かさを汲み取っていくことができることであろう。そして獲得された対象の本質は、存在形成の可能性に算入され、そこをさらに豊かに耕していく。これによって、体育においても、新たな自己への生成が、その存在のうちに可能性として保障されていくのである。ここから体育においても人間の生成は、自閉的で内的完結的なものにとどまることなく、外に開かれた発展的な過程として描かれていく。

ところが、体育の具体的世界においても、対象それ自体は自律的に自己展開している為、その関係は常に対象から「私」へと向かうとは限らず、対象に対して「私」が作用を与えることもあり得る。それゆえに、体育においても対象への献身は、常に「私」に対して贈与をもたらしてくれるものではなく、「私」が対象に対してそこに欠落した豊かさを贈与することもあり得る。例えば、体育の具体的な場面において、「私」の振る舞いが「私」をとりまく学習集団により契機を贈与することもあるだろう。「私」の真摯な態度がその場の情緒的規範に作用することもあり得る。これによって、その学習集団の規範的な雰囲気は、よりよき方向へと再構成されていくかも知れない。無論、全く逆の事例も可能性としてあり得るのであるが、また「私」の誠実な態度が、そこで行われているバスケットボールゲームの情緒的な倫理意識に作用し、ダーティーなプレイが抑制されていくかもしれない。それは紛れもなく体育の具体的状況において「私」から対象へと発せられた贈与と言えよう。即ち、体育の現実においても、個々人の存在形成の可能性に秘められた豊かさが贈与されることによって、対象それ自体も再構成され得る。それによって、彼を取り巻く体育の具体的な世界はよりよき方向へと進展し、翻ってそれがより高次な対象として「私」や彼らに立ち迫ってくる。より高次なものに再構成された対象は改めて「私」に対峙して、より質の高い要

求をするであろう。

体育においても、対象との関係は、相互方向の献身と贈与が予想され得る。従って、体育学における人間学的論議においても、対象は、第一の弁証法の内在的主観性を克服し得る重要な契機であり、その交点に対置することによって、第二の弁証法を構成していくこととなる。そして、そこには第一の弁証法との相互方向の緊張関係が認められる。ここに体育における人間の存在と生成の第二の弁証法をみることができよう。

これまで、Guardini, R. の人間学的論議に従い、体育における人間の存在と生成を二つの弁証法から捉えてきた。これらから、体育における人間学的論議は、人間の存在と生成の総体を把握するために、最終的な弁証法へと導かれていく。従って、体育学においても人間の存在と生成の全体構造は、二つ弁証法の対置とその連関から説明されていくこととなろう。即ち、体育学における人間の存在と生成の総体についての理論構成も、やはり二重の弁証法の調和的な対置関係として想定されていく。つまり、それは第一の弁証法を底辺とし、第二の弁証法を高さとして構成される三角形として描かれていく。それによって、その底辺において体育における人間の内在的な生成における検証と克服という内在的な緊張関係が、そして高さにおいて体育における選択と献身という外在的な緊張関係とともに相互方向的な贈与という非連続的な緊張関係が描かれていく。そして、三点とそれらの連関を正しく展望し得る点を頂点として、三角錐が形成されることとなる。体育学は、この展望点から体育における人間の存在と生成の総体を見通すことができ、そこには、体育における人間の具体的な生の全体性の真実が明瞭に映し出されていくのである。

さて、このようにして構成された三角錐の論理は、体育における人間の存在と生成の総体を偏りなく見通し得る中立性を有している。そして、それは体育学的認識の可動性を、その中立

性において保障している。従って、現実的には、体育学的認識において、何らかの正当な理由によって、特定の契機に重点が置かれることも予想される。この場合、それらの三契機の何れかを強調することによって展望点の位置が相違し、異なった全体的調和のもとに、その都度、新たな三角錐が構成されていく。ここで、体育におけるそれらの三契機について、改めて目を向けてみなくてはならない。即ち、その全体構造において、邂逅と対象の契機は、とりわけ身体運動文化の特徴から、特有の可能性を秘めているように思われる。つまり、像という契機は、存在と生成の基底として体育という枠組みを超えた一般性を有するが、体育の媒介財であるところの身体運動文化が、他に比して人間の全人的で身体的な直接体験を豊かに保障し得るという点を、そしてそのような全人的な直接体験における人格的実存への可能性の豊かさと、さらには身体運動文化から贈与される外在的契機の固有の特徴を重要視するならば、体育における邂逅と対象の契機は、人間の存在と生成に対する特有の教育可能性を有するのではないだろうか。この全人的な直接体験が必ずしも身体運動文化の独占ではないにせよ、体育という教育領域においては、それが人間の一人ひとりに対して可能性として等しく、そしてより大きく開かれていることによって、体育は、人間の生成に対して、特有の寄与をなし得るように思われる。従って、何れかの一つを強調した体育学的認識はあり得る。例えば、像に重点を置くならば、その体育学的認識は、個々の成熟と可能性の豊饒化の促進が主題化され、邂逅に重点を置くならば、それは達成や自己実現等にみられるような実存的体験に焦点化され、また対象に重点を置くとき、それはもしかしたら身体運動文化の諸形式の本質的受容やそこでの創造的な努力等に集約されていくことであろう。しかし、それが三角錐を構成する以上、何れに重点を置こうとも、必然的に他の二契機を随伴し、それらに少なからず依存することとなる。

従って、単独の契機のみでは体育学的認識は成立しない。すべては人間の存在と生成の真の姿とそれら三契機の連関を見通し得る展望点から構成されていくのである。やはり体育学においても人間の存在と生成を見通し得る展望点こそが、体育学的認識の論理的拠点となるのである。

Guardini, R. が導き出した人間学的認識は、体育学における人間学的論議において、体育における人間の存在と生成のダイナミクスの総体を展望し得る学的視野を提示してくれる。そして、体育学があのような調和的な三角錐の眺望点から体育における人間の存在と生成の総体を眺めるとき、体育においても、人間は誰しもがその存在において豊かな可能性とともに常に外へと開かれており、体育における所与の現実において努め、そこから外在的契機を獲得しながら存在形成の可能性を豊かに耕し、どこまでも高まりゆく、そのような勇猛で前進的な生成の道程の途上にあることに想い至らせられることであろう。体育学がその人間学的論議において、体育における人間の存在と生成を理性的に見極め、それを理論的に整理していこうとすることは、体育学的な人間形成理論の構築に確かな基礎を与えていくのではないだろうか。体育学における人間学的営為は、その人間学的問題設定に対する解の探究のみにとどまらず、体育の本質論議、すなわち体育学的な人間形成の理論構築へと必然的に繋がっていくのである。

3. 結 語

体育学において人間学的問題は重要な学的課題の一つである。従って、体育学は、人間学的論議を自覚的に立ち上げ、その究明にむけて学的営為を継続的に積み重ねていかなくてはならない。しかしながら、それは依然として難解であり、その探究の道程は険しい。そしてその道程において探究の歩みを正しく進めていくためには、確かな人間学的な思考能力が必要となるだろう。従って、体育学は、まずは多くの有効な人間学的論議の学的形式を学んでいくことに

よって、その人間学的な思考能力をより豊かに耕していかななくてはならない。ここでは、その端緒の一つとして、Guardini, R. の教育学における人間学的論議を直接の分析対象として取り上げてきた。これによって、体育における、複雑で入り組んだ人間の存在と生成の総体が、構造的に、そして包括的に把握され得るように思われる。ただし、彼のこのような人間学的論議も、そこに一定の教育学的有效性が認められるにせよ、それが唯一無比の完全なる理論形式であるとは断定できない。体育学は、ここで導かれた人間学的認識の有効性とその限界を正しく見極めつつ、併せてさらに教育学における人間学的論議の諸形式をより広く学ぶことを通じて、その人間学的思考能力を高めていかななくてはならない。それによって体育学は体育における人間の存在と生成をより適正に把握することができ、そして体育における人間形成をより豊かに、そしてより厳密に論じていくことができるように思われる。

注および引用・参考文献

- 1) 川村英男 (1966) 体育原理, 体育の科学社, p. 75.
- 2) これについて, 日本体育学会機関誌「体育学研究」第1巻から第49巻, 並びに日本体育学会大会号(抄録集)の別冊刊行が始まったと思われる第22回大会号から第55回大会号, 日本体育・スポーツ哲学学会機関紙「体育・スポーツ哲学研究」第1巻から第26巻を通覧した。ここで, その一々の詳細を挙げ得ないが, 大凡の傾向として取り敢えず文中表現に留め置いた。無論, 体育学における人間学的営為をどの程度厳密に規定するかにもよるが, ここでは, それを, 極めて限定的に, 即ち, その直接的・能動的な問題設定にのみ用いた。
- 3) 哲学事典 (1977) 平凡社, p. 1065.
- 4) 哲学事典, *ibid.*, p. 1066.
- 5) Cassirer, E.: 宮城音弥訳 (1982) 人間—この象徴を操るもの, 岩波書店, p. 30.
- 6) Genner, B. (1974) Einführung in die Pädagogische Anthropologie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S.18.
- 7) Flitner, W. (1970) Allgemeine Pädagogik,

- Ernst Klett Verlag, S. 13.
- 8) 平野智美 (1968) 教育活動の人間学的基礎—実存哲学を中心として—, 上智大学教育学心理学論集, 3: 34.
 - 9) 平野智美, *ibid.*, p. 38.
 - 10) Langeveld, M. J. (1965) Einführung in die theoretische Pädagogik, S. 60.
 - 11) Kuhn, H. (1961) Romano Guardini Der Mensch und das Werk, Kosel-Verlag, S. 16-34.
 - 12) 平野智美 (1974) グァルディニー, 杉谷雅文 (編) 現代のドイツ教育哲学, 玉川大学出版部, p. 284.
 - 13) 平野智美, *ibid.*, p. 288.
 - 14) 平野智美, *op. cit.*, 8), p. 37.
 - 15) 平山久美子 (1979) R. グァルディニーの陶冶理論における対立 (Gegensatz) 概念の意義について, 上智大学教育学研究, 7: 13.
 - 16) Guardini, R. (1950) Das Ende der Neuzeit, IM Werkbund Verlag, S. 102.
 - 17) 平野智美, *op. cit.*, 12), p. 290.
 - 18) Guardini, R., a.a.O., 16), S. 83.
 - 19) Guardini, R. (1959) Grundlegung der Bildungslehre, IM Werkbund Verlag, S. 7.
 - 20) Guardini, R., *ditto*, S. 9.
 - 21) Guardini, R., *ditto*, S. 22.
 - 22) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 6.
 - 23) Guardini, R., a.a.O., 16), S. 88.
 - 24) 平野智美, *op. cit.*, 12), p. 289.
 - 25) Guardini, R., a.a.O., 16), S. 86.
 - 26) Guardini, R., *ditto*, S. 87-88.
 - 27) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 6-7.
 - 28) Guardini, R., *ditto*, S. 7.
 - 29) Guardini, R., *ditto*, S. 8.
 - 30) Guardini, R., *ditto*, S. 8-9.
 - 31) Guardini, R., *ditto*, S. 9.
 - 32) Guardini, R., *ditto*, S. 14.
 - 33) Guardini, R., *ditto*, S. 23.
 - 34) 平野智美, *op. cit.*, 12), p. 293.
 - 35) 平野智美 (1960) グァルディニーにおける教育学の基礎構造, 教育哲学研究, 2: 70.
 - 36) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 23.
 - 37) Guardini, R., *ditto*, S. 24.
 - 38) Guardini, R., *ditto*, S. 25.
 - 39) Guardini, R., *ditto*, S. 26.
 - 40) 桜井佳樹 (1989) 理念なき時代のビルドゥング—グァルディニーのビルドゥング論における「弁証法」の問題, 教育哲学研究, 60: 33.
 - 41) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 26.

- 42) Guardini, R., ditto, S. 27.
- 43) Guardini, R., ditto, S. 26.
- 44) Guardini, R., ditto, S. 26
- 45) 平野智美, op. cit., 35), p. 70.
- 46) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 26.
- 47) Guardini, R., ditto, S. 27.
- 48) Guardini, R., ditto, S. 28.
- 49) Guardini, R., ditto, S. 34.
- 50) 平野智美, op. cit., 35), p. 71.
- 51) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 29.
- 52) Guardini, R., ditto, S. 29-30.
- 53) Guardini, R., ditto, S. 30.
- 54) Guardini, R., ditto, S. 30-31.
- 55) Guardini, R., ditto, S. 31.
- 56) Guardini, R., ditto, S. 33.
- 57) Bollnow, O. F. (1959) Existenzphilosophie und Pädagogik, W. Kohlhammer Verlag, S. 99-100.
- 58) 平野智美, op. cit., 12), p. 294.
- 59) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 31-32.
- 60) Guardini, R. (1969) Die Begegnung. Guardini, R. Bollnow, O. F. (Hrsg.) Begegnung und Bildung, IM Werkbund Verlag, S. 14.
- 61) Bollnow, O. F., a.a.O., 57), S. 100-101.
- 62) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 17.
- 63) Guardini, R., ditto, S. 31.
- 64) Guardini, R., ditto, S. 32.
- 65) Guardini, R., ditto, S. 32-33.
- 66) Bollnow, O.F., a.a.O., 57), S. 100.
- 67) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 33.
- 68) Guardini, R., ditto, S. 34.
- 69) Guardini, R., ditto, S. 33-34.
- 70) Guardini, R., ditto, S. 31.
- 71) Guardini, R., ditto, S. 33.
- 72) Guardini, R., ditto, S. 34.
- 73) 平野智美, op. cit., 12), p. 296.
- 74) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 35-36.
- 75) 平山久美子, op. cit., 15), p. 21.
- 76) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 33.
- 77) 平野智美, op. cit., 35), p. 72.
- 78) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 10.
- 79) Guardini, R., ditto, S. 36.
- 80) Guardini, R., ditto, S. 10.
- 81) Guardini, R., ditto, S. 37.
- 82) Guardini, R. (1955) Der Gegensatz—Versuche zur einer Philosophie des Lebendig Konkreten—, Matthias-Grunewald-Verlag, S. 196.
- 83) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 37.
- 84) Guardini, R., ditto, S. 37.
- 85) Guardini, R., ditto, S. 38.
- 86) Guardini, R., ditto, S. 38-39.
- 87) Guardini, R., ditto, S. 38.
- 88) Guardini, R., ditto, S. 39-40.
- 89) Guardini, R., ditto, S. 41.
- 90) Guardini, R., ditto, S. 39-40.
- 91) 桜井佳樹, op. cit., 40), p. 34.
- 92) 平野智美, op. cit., 12), p. 297.
- 93) 杉谷雅文 (1960) 人間観の変遷と現代教育学, 教育哲学研究, 2: 9.
- 94) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 41.
- 95) Guardini, R., a.a.O., 60), S. 17.
- 96) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 42.
- 97) Guardini, R., a.a.O., 60), S. 14.
- 98) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 41.
- 99) Guardini, R., ditto, S. 42.
- 100) 平野智美, op. cit., 35), p. 74.
- 101) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 42-43.
- 102) Guardini, R., ditto, S. 43.
- 103) 境沢和男 (1960) 教育における実存の問題の視点, 教育哲学研究, 2: 21.
- 104) Guardini, R., a.a.O., 16), S. 118.
- 105) Guardini, R., a.a.O., 82), S. 211.
- 106) 平山久美子, op. cit., 15), p. 25.
- 107) Guardini, R., a.a.O., 29), S. 43.
- 108) 平野智美, op. cit., 12), p. 298.
- 109) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 43.
- 110) 平野智美, op. cit., 12), p. 300.
- 111) Guardini, R., a.a.O., 16), S. 87.
- 112) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 10.
- 113) Guardini, R., a.a.O., 82), S. 50.
- 114) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 34.
- 115) Guardini, R., a.a.O., 82), S. 211.
- 116) Guardini, R., ditto, S. 91.
- 117) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 43.
- 118) Guardini, R., ditto, S. 44.
- 119) Guardini, R., a.a.O., 60), S. 43.
- 120) 平野智美, op. cit., 12), p. 294.
- 121) 桜井佳樹, op. cit., 40), pp. 35-37.
- 122) 桜井佳樹, op. cit., pp. 30-31.
- 123) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 44-45.
引用箇所において「像」と「邂逅」そして「献身」が並列的に表記されているが、基本的には、その文意から「像」と「邂逅」そして「対象」の並列表記が適当と思われる。ただ、ここでは原典の表記に即して訳した。
- 124) 平山久美子, op. cit., 15), pp. 22-23.
- 125) Guardini, R., a.a.O., 19), S. 45.

126) Guardini, R., ditto, S. 45.

128) 桜井佳樹, op. cit., 40), p. 33.

127) 平山久美子, op. cit., 15), p. 23.

受付 2005年6月6日

受理 2005年10月31日